

シリーズ①  
何が  
変わる!?

新学習指導要領スタート特集  
資質・能力を  
基盤とした学力論とは?!

早分かり  
カンタン解説

奈須が斬る!

奈須 正裕 上智大学教授 / 教育課程部会委員

資質・能力の3つの柱

新学習指導要領では、子どもに育成する学力や評価の基本的な考え方が大きく変わりました。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」からなる、資質・能力の3つの柱です。(資料 1)

学力というと、「何を知っているか」をイメージしがちです。しかし、知識を学ぶのは所有が目的ではありません。自らの人生を切り拓いていく、そのための材料や道具とすべきです。もっているだけで使えない「宝のもち腐れ」型学力ではなく、自在に活用して個人の人生や社会全体をよりよいものにしていけるような質の学力を目指す。これが資質・能力を基盤とした学力論です。(資料 2)

優れた問題解決に必要な「有能さ」

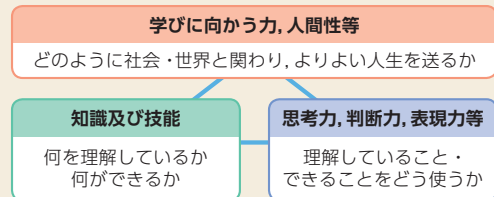
資質・能力は英語のコンピテンシーに対応し、素材に訳すと「有能さ」という意味になります。資質・能力を基盤とした学力論では、人生の中で出合う様々な問題を適切に、また自分らしく解決していくのに必要十分な「有能さ」をトータルで高めていくことを目指します。

1970年代に、社会的・経済的な成功に影響する要因の研究が盛んになされ、子ども時代の学校の成績や学歴、所有する資格の数等が十分な予測性をもたないことが分かってきました。人生で出合う問題を適切に解決し、人生を成功に導くには、知識の所有だけでは不十分なのです。

例えば、アメリカ国務省は海外の任地で文化事業を企画する外務情報職員の人事選考をペーパーテストで行っていましたが、それらのスコアと任地での仕事ぶりの間には相関が認められませんでした。実際の仕事ぶりを左右したのは膨大な専門知識ではなく、倫理観や感情の自己調整能力、コミュニケーション能力や社会スキルといった非認知的能力、3つの柱でいう「学びに向かう力、人間性等」だったのです。(資料 3)

欧米に比べれば、日本の学校はかねてより道徳や特別活動等を中心に、非認知的能力の育成に心を砕いてきました。低学年の子どもが助け合って給食の準備をテキパキと進める姿に対し、海外の訪問者は驚きと称賛の声を上げます。しかし、従来はそれらの教育成果を「学力」とは考えてきませんでした。新学習指導要領では、優れた問題解決に必要な「有能さ」という視点から学力論を抜本的に見直し、再構築したのです。

資料 1 育成すべき資質・能力の3つの柱



資料 2 知識をもっている、使えるとは限らない

資料 3 実際の仕事ぶりを左右した要因

- 異文化対応の対人関係感受性: 文化的背景が異なる人たちの語りの奥にある真意を聴き取る能力  
【高度なコミュニケーション能力】
- 他者への前向きな期待: 敵対する人も含め、全ての人の基本的な尊厳と価値を認める強い信念、ストレス下でも前向きな信念を保持し続ける能力  
【倫理観、寛容さ、意欲、感情の自己調整能力】
- 社会的なネットワークをすばやく察知する力: そのコミュニティにおいて誰が誰に影響を及ぼしているかをすばやく把握する能力  
【社会スキル】

非認知的能力 = 「学びに向かう力、人間性等」が人生における成功を左右する……ならば、それも学力に加えるべき!

何が変わる!?

AI化の進展は、「教育の人間化」の好機

「有能さ」は時代や社会を超えて普遍ではありません。夜中に大学生がレポートを書こうとして、必要な資料を手に入れるのを忘れていたことに気づいたとしましょう。20年前であれば、翌朝図書館が開くまで手も足も出ませんでした。かつては知識や情報の単なる所有は時に決定的な要因となり、だからこそ暗記がもてはやされたのです。

しかし、今ならスマホで検索し、あるいはSNSでヘルプすれば、一瞬のうちに膨大な情報が入手できます。むしろ重要なのは、膨大な情報の信頼性を判断する力であり、それらを組み合わせる自分の意見を形成し、適切且つ個性的な表現へと仕立て上げる能力でしょう。

もちろん、判断や意見の形成には知識が不可欠です。しかし、それは「民主主義」とは何かに関する概念的な深い意味的理解であって、その構成要素である「三権分立」や「議院内閣制」に関する要素的で暗記的な知識ではありません。

AIの進化と普及が、こういった動きに拍車をかけています。もっとも、AIと人間は違います。一見同じようなことができていように見えても、AIと人間では、そのプロセスは大きく異なるのです。

(資料 4)

AI時代の到来は、むしろ「教育の人間化」、つまり人間にこそできること、人間こそが行うべきことへと教育の重点を移動させる動きをもたらします。これからの学校教育には、AIやICTも含め様々な道具を効果的に用いて優れた問題解決を成し遂げられるよう、子どもの「有能さ」を高めていくことが望まれているのです。

持続可能な社会の実現という価値観

「有能さ」のあり方を巡るもう1つの重要な視点は、包摂的で持続可能な社会の実現という価値観です。先進国を中心に経済を優先した開発を進めてきた結果、貧富の格差や環境の破壊など、様々な問題が地球上に生じています。これら、開発を巡る数々の問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、全ての人が共生できる公正な地球社会づくりに参画することが今、私たちに求められているのです。

たとえば、OECDの「学びの羅針盤」2030では地球全体のwell-being、つまり、全ての人が個人的・社会的に健やかに生きることが最終的に目指すべき目標とされています。そして、それを支えるものとしてコンピテンシー(competencies)、つまり「有能さ」=資質・能力が位置付けられています。(資料 5)

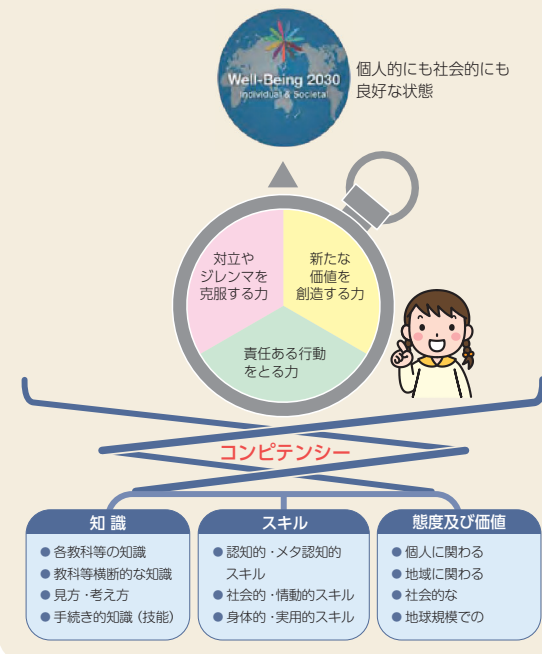
新学習指導要領でも多様性ということが重視されていますし、前文では子どもを「持続可能な社会の創り手」に育てることがうたわれています。(資料 6)

このように、資質・能力を基盤とした学力論は、個人や学校や教科に閉ざされたものではなく、よりよい世界のあり方を求める価値観の中で検討され続けるものなのです。

資料 4 AIにできること・できないこと AI社会において人間が担うべきこと

- AIは「赤坂」「おいしい」「イタリアン」といったキーワードを拾い、ビッグデータを検索しているだけ。
- AIは日本語のような自然言語の意味や文脈を理解できない。
- AIは価値の判断もできないし、させてはいけません。
- AIと人間、それぞれが得意なこと、担うべきことをはっきりとさせた上で、教育の課題を考える時代が到来している。

資料 5 OECD「学びの羅針盤」2030



資料 6 小学校学習指導要領前文を吟味しよう! (幼稚園から高校まで基本的に同じ文面)

一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。